

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：12301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2016

課題番号：24730723

研究課題名(和文)からだ・気づき・対話のアート教育

研究課題名(英文)Art Education based on Body-mind/Awareness/Dialogue

研究代表者

郡司 明子(Gunji, Akiko)

群馬大学・教育学部・准教授

研究者番号：00610651

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、創造的なアート教育による学びの質的変換と活性化を目指したものである。根源的存在としての「からだ」を「命の営み」と捉え、「生の技法」として統合するアート教育の可能性を、実践と理論の往還に基づき追究してきた。特に、筆者による小学校「アート」の実践を教科以前の「からだ・気づき・対話」という視点で省察し、その意義を明らかにする(「からだ・気づき・対話のアート教育—小学校の授業実践から、その意義を探る—」『子ども学』第3号、萌文書林、2015)と共に、身体性、協同性、創造性を重視した題材開発を行い、幼小中高大の教育現場から美術教育に携わる教員研修に至るまで、広く実施・提案してきた。

研究成果の概要(英文)：This study aims qualitative changes and stimulation of learning through creative art education. The author has pursued the possibilities of art education considering “Body-mind,” fundamental existence “flow of life” and integrates it with “the art of life,” based on the circulation of art education from practice to theory and back. Particularly she has studied her practice of “Art” in elementary school from the aspect of “Body-mind・Awareness・Dialogue” on a preliminary step toward the subject. She also claims how it is significant in art education(Art Education based on Body-mind・Awareness・Dialogue, Child Research. , vol.3, Houbunshorin, 2015.) Moreover, she has developed teaching materials for art, focusing on embodiment, cooperativity, and creativity. She has proposed and implemented creative art education widely in teacher training and education in preschool, elementary, junior-high, senior-high schools and universities.

研究分野：美術教育

キーワード：身体性 協働性 創造性 アート教育 レッジョ・エミリア・アプローチ

1. 研究開始当初の背景

(1) 「生」の破壊によって綻ぶ子どもの姿の内実には迫ると共に、それらを打開する可能性を、筆者自身に取り組んできた身体性・協働性・創造性を重視するアート教育に見出してきた。アート教育は、佐藤学らが「生きる技法としてのアート」という概念で想像力と創造性を育む教育¹⁾として価値づけて以来、美術教育を中心に浸透しつつある。

(2) 知識習得型の学習観を解きほぐし、社会構成主義や状況的学習論が提示する「学習＝相互行為を通じた考え方・振舞い方の変化」と捉えるワークショップの学びに従事してきた。²⁾特に「からだ気づき」(ワークショップを通じた身体知へのアプローチ/高橋和子)³⁾の示唆により、「からだ・気づき・対話」をアート実践における学びの基軸としてきた。

2. 研究の目的

(1) 創造的なアート教育による学びの質的変換と活性化を目的とし、「からだ・気づき・対話」に基づく「根源的能動的な学び」(佐伯胖)のあり方を構想する。さらに、アート教育の視点から既成の美術科教育を再考し、その発展と充実に寄与する理論研究を行う。

(2) 生(活)の問題への創造的なアプローチを通して、「生の技法」に接続するアート教育の題材及び指導法の開発を行う。「生の技法」は「学びの技」(habits of mind)と同義に捉えると、「何かを達成しようとするときに発揮される知的精神的行動的な構え」に相当する。⁴⁾これらを推進し、広義の身体性(全体性)を回復するアート教育の実践研究を行う。

3. 研究の方法

(1) からだ・気づき・対話によるアート教育の題材及び指導法の開発に際し、それに資する先行研究に関して、実践可能な身体知として体得的に調査研究を進める。気づきと対話を重んじ、多感覚の活性化を促す「からだ気づき」(高橋和子)や「レッジョ・エミリア・アプローチ」等は、文献と同時にワークショップなどの研修を通じて、理論と実践の双方向から具体的なアート教育への示唆が期待される。

(2) アート教育の理論および実践内容を学校現場に還元するため、比較的自由度の高い教育現場(大学附属学校園やアートプロジェクトにおけるワークショップ等)を中心に、実践・検証を行う。また教員養成学部の特徴を生かし、大学授業や教員研修等の場を通じて、教育現場の実態把握に努めると共に、現場の状況やニーズに合致する実践内容や指導法に改良し、子どもたちの切実な学びとなるアート教育のあり方を追究する。

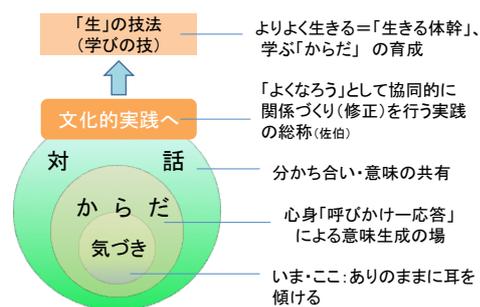
4. 研究成果

(1) 子どもの生きづらさの内実に関する調査から、不規則な生活リズム、希薄な生活感、居場所の喪失、ネット環境下の影響、遊びの変化に伴う身体性の欠如、子どもの貧困等が挙げられた。中でも深刻さが加速するネット環境下では、コミュニケーション専制の時代(土井隆義)においてネット依存、過剰な関係依存と排除、とらわれや縛りといった不安状況にある子どもの姿が見えてきた。⁵⁾引き続きリアルな子どもの声に耳を傾け、現状把握に努めたい。

(2) 社会構成主義(対話)に基づく市民教育としてアートの活動を重視するレッジョ・エミリア・アプローチの調査を進めてきた。イタリア現地での研修やレッジョ・スタッフとのミーティングを重ね、Pedagogy of listening: 傾聴の教育哲学への理解を深めてきた。(International study Group 2012, Study Group from Japan 2016)

(3) 「からだ・気づき・対話のアート教育」の理念を「身体の学びを基軸とした統合的な学びの可能性を探り、気づきと対話を重視した造形活動を通じて「生きる体幹」＝「生の技法」を育む」とし、その在りようを構造化して捉えた。その際、佐伯胖の「学びのドーナツ理論」⁶⁾を参照し、学びの局面をI・You・They(一人称～三人称)的に捉えることに造形活動を重ね合わせ、「気づくからだ」から対話を経て文化的実践へと至る過程を示し、その先に「生の技法」を据えて、本研究におけるアート教育の全体構造とそのシステムを明らかにした。

アート教育の構造



(4) からだ・気づき・対話に基づき、「生の技法」に接続するアート教育の題材開発及び実践・検証を行った。以下、身体性・協働性・創造性において特徴のある三つの事例を提示したい。

① 「奏でよう♪中之条ビエンナーレ」

(中之条ビエンナーレ 2013 教育普及プログラム参加/寺内愛乃;卒業研究・郡司) 子どもたちが地域の廃材で楽器をつくり、美術作品から得た印象(鑑賞)を音で表し(合奏)、中之条の街をパレードする。音を契機

とし、多感覚性を活かすと共に祝祭性を帯びた活動となった。

②「クレープ de アート」

(中之条ビエンナーレ 2013 教育普及プログラム参加/宮川紗織;卒業研究・郡司)

対話を通じて美術作品を鑑賞し、子どもたちが得た印象を各自クレープの上に地域の食材で表し、包んでいただく(味わう)。食を契機とし、多感覚性や地域性を活かす活動となった。

③「からだ・気づき・対話の鑑賞教育(劇化)」

対話を通じて美術作品を鑑賞し、調べ学習を経て、その解釈から新しい鑑賞/表現として劇化する。変身(衣装やカツラをつけて)＝「なりきる」ことが重要なテーマ。美術作品の登場人物になりきって、協働して劇作りを行い、演劇鑑賞につなげる。「自分ではない何かになりきることで新しい自分を発見する」という学生の感想や「からだを使って美術作品の全体や細部にまで気づき、気づいたことを子どもたち同士で対話する中で、更に気づいたことを深められる」といった中学校現職教員の意見等が寄せられた。

(5) 前任校(お茶の水女子大学附属小学校)における「アート」授業の一部を群馬大学教育学部附属小学校等で追実践・検証を行い、アート教育実践事例の収集及び記録に努めると共に、それらの省察から身体性を活性化させる要素「ひらく/感じる/問う-聴く/なりきる/見る-表す/味わう」を抽出、分類した。これらを踏まえ、本研究の動機(背景)、理念、指導法、具体的な実践事例と省察を論文にまとめた。「からだ・気づき・対話のアート教育-小学校の授業実践から、その意義を探る-」『子ども学』萌文書林, 2015

身体性(からだ・気づき・対話)を活性化させる視点

<p>筋感覚をほぐす 呼吸を急激</p>	<p>五感を働かせる 一部の感覚を閉ざす</p>	<p>姿勢・構え・リズム 模倣・判断</p>
<p>なぞり・入り込む 内側からの認識</p>	<p>からだを(で)表す からだを見つめる</p>	<p>じっくり向き合う 体内に取り込む</p>

(6) 先行研究であるレッジョ・エミリア・アプローチのドキュメンテーション(学びの可視化・記録)に学び、「こども×アート×ドキュメンテーション展」(於:前橋)2012(森田智美;卒業研究・郡司)を開催。保育現場におけるアート実践に基づく活動記録を展示することにより、広く市民に子どもとアートの親和性や学びの過程を提示し、対話の機会を設けることができた。さらに、ここで得た知見は、乳幼児から成人に至る生活・人生・学びの経験をアートの視点から深め

可視化する「ライフ×アート展」(於:お茶の水女子大学)2015,2016の企画・運営へと発展している。展覧会において、身体性を重視したワークショップ開催や作品展示、トークイベント等を通じ、参加者と共に「生」そのものに向き合う学びの視点を得た。

(7)ここに記した題材開発や理論に関する研究成果は、幼小中高大の教育現場から美術教育に携わる教員研修に至るまで、広く実施・提案すると共に、国内外における学会発表やワークショップ等での意見交流を通じ、検証を重ねてきた。また、大学紀要や専門誌等において論文を発表し、アート教育の理論と実践を往還しながら研究テーマを追究してきた。

(参考・引用文献)

- 1) 佐藤学・今井康雄『子どもたちの想像力を育てる』東京大学出版会, 2003
- 2) 茂木一司編著『共同と表現のワークショップ』東信堂, 2010
- 3) 高橋和子『からだ-気づき学びの人間学-』晃洋書房, 2004
- 4) OECD 教育研究革新センター『アートの教育学』明石書店, 2016, 347-348
- 5) 土井隆義『つながりを煽られる子どもたち』岩波書店, 2014
- 6) 佐伯胖『「学ぶ」ということの意味』岩波書店, 1995/佐伯胖『幼児教育へのいざない』増補改訂版 東京大学出版会, 2014

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計15件)

①新井哲夫・郡司明子・ほか9名「美術科教育における授業研究のすすめ方」美術教育学第0号, 2017年, 143-153[査読無]

②郡司明子「みる楽しみを-子どもとひらく鑑賞活動への誘い-」群馬大学教育実践年報第5号, 2016年, 38-39[査読無]

③郡司明子「からだ・気づき・対話のアート教育-小学校の授業実践から、その意義を探る-」子ども学 第3号, 2015年, 113-132[査読有]

④茂木一司・郡司明子・ほか10名「地域アートプロジェクトにおける美術教育の実践-中之条ビエンナーレに置ける表現と鑑賞のワークショップ-」群馬大学教育実践研究 第31号, 2014年, 47-77[査読有]

⑤郡司明子「図画工作(えがく・つくる)・・・以前のことから」教育美術 No856, 2013年, 36-37[査読無]

⑥郡司明子・ほか2名「図画工作科において〈触る〉活動を重視した実践研究-卒業制作

『Kihada』を活用した授業実践」群馬大学教科教育学研究 第12号, 2013年, 35-44[査読有]

⑦茂木一司・手塚千尋・郡司明子・ほか7名「Workshop on Workshopによる研修のデザイン-ワークショップリーダー人材育成研修を事例にして-」群馬大学教育実践研究 第30号, 2013年, 61-84[査読有]

⑧茂木一司・郡司明子「小学校におけるワークショップ型学習に関する実践研究-お茶の水女子大学附属小学校の事例-」群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編 第48巻, 2013年, 53-66[査読有]

⑨郡司明子「題材の探し方・題材の合った材料の探し方-題材・材料=『学びの種』を探しに」教育美術 第74巻, 2013年, 30-31[査読無]

[学会発表] (計43件)

①郡司明子「からだ・気づき・対話のアート教育Ⅳ-身体性に基づく鑑賞教育」第39回美術科教育学会静岡大会, 2017年, 静岡県コンベンションアーツセンター

②郡司明子・刑部育子・お茶の水女子大学こども園・お茶の水女子大学附属幼稚園・お茶の水女子大学附属いずみナーサリー・他8名「夏色タープ」ワークショップ他, 代3回お茶の水女子大学ライフ×アート展, 2016年, お茶の水女子大学 Student commons

③郡司明子「からだ・気づき・対話の鑑賞教育」藤岡市教育委員会図工美術部会研修会(招待講演) 2016年, 藤岡市立小野小学校

④Mori M, Uemura T, Gyobu I, Saeki Y & Gunji, A 「Providing Young Children Rich Experience with Intelligent Materials as the Key for Developing Their Aesthetics and Creativity.」 EECERA 2016Conference. 2016年, ダブリンシティ大学(アイルランド)

⑤郡司明子「からだ・気づき・対話のアート教育Ⅲ」第36回美術科教育学会奈良大会, 2014年

⑥布山タルト・郡司明子・茂木一司・他2名「図工・美術教育の明日を担うために」群馬大学長期研修院美術教育開設プレイベント, 2014, 群馬大学

⑦郡司明子「色の題材あれこれ-造形学習の現状報告 小・中学校を中心に-」第63回日本色彩教育研究会本部研修会, 2013, 東京家政大学

⑧茂木一司・手塚千尋・郡司明子・佐藤真帆「日本文化・美術をテーマとしたワークショップ・デザインの検討」第52回大学美術教育学会京都大会, 2013年, 京都教育大学

⑨手塚千尋・茂木一司・郡司明子・他4名「The Mitate workshop」InSEA European Regional Congress:Tales of ART and Curiosity :Canterbury2013, 2013年, 英) Canterbury Christ church University

⑩茂木一司・上田信行・中原淳・苜宿俊文・郡司明子・他11名「Formal× Informal Learning ワorkshopで何ができる NOか!？」「アート・多文化・伝統・身体・メディアを活用する表現と共同の創発的な学びの場の開発」総括・公開コロキウム, 2013年, 東京都美術館

⑪郡司明子「からだ・気づき・対話のアート教育Ⅱ」第35回美術科教育学会島根大会, 2013年, 島根大学

⑫郡司明子・辰巳豊「実践を通して表現の源を考える」ワークショップ「生活から生まれるアート」お茶の水女子大学 ECCELL 公開シンポジウム, 2012年, お茶の水女子大学

⑬郡司明子「からだ・気づき・対話のアート教育-子どもの創造性を育む・絵に表すことを通して-」平成24年度高崎市幼保小連絡協議会実技研修会(招待講演) 2012年, 高崎市庁舎

⑭佐伯胖・刑部育子・郡司明子・他3名「美術教育と幼児教育の融合と展望」, 「レッジョ・エミリア幼児教育から見たこと、学びの根源はアートにあった」シンポジウム, 2012年, 多摩美術大学世田谷キャンパス

[図書] (計1件)

①磯部錦司・郡司明子・ほか10名『造形表現・図画工作』建帛社, 全182頁, 2014年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

郡司 明子 (GUNJI, Akiko)
群馬大学・教育学部美術教育講座・准教授
研究者番号: 00610651

(2) 連携協力者

茂木 一司 (MOGI, Kazuzi)
群馬大学・教育学部美術教育講座・教授
研究者番号: 30145445

刑部 育子 (GYOBU, Ikuko)
お茶の水女子大学・生活科学部・准教授
研究者番号: 20306450